

研 究 部

I. 部の重点

1. 子どもたちに「ことばの力」を育てる研究を推進する。
2. 教師の力量を高める日常の研修活動を推進する。合わせて、一人一研究会参加を実現する。
3. 2年計画のまとめを行い、次年度以降の方向性を明らかにする。

II. 各係運営計画

《研究係》

1. 学校研究課題の研究推進

- (1) 研究課題や仮説の解明が円滑に推進されるように企画・立案し、運営にあたる。
 - ア. 授業研の計画・推進。
 - イ. 全体研究, 学年部会研究, 研究推進委員会の運営。

2. 全体研究の運営

- (1) 理論研究および課題研究に向けての協議・検討。
- (2) 研究計画, 推進に関する共通理解・確認。
- (3) 授業研究の事前研・事後研。
- (4) 研究のまとめと反省。

3. 学年部会研究の組織化

- (1) 各学年に担任外が加わって構成。
- (2) 1本の全校研と他の学級で学年研(交流授業)を実施。
- (3) 学打ちを利用して授業案検討・学年研の事後研等を行う。

4. 研究推進委員会の運営

- (1) 各学年の研究推進委員で構成する。研究部員は兼任とする。
- (2) 学年部会と連携をとり, 研究を推進する。

5. 研究部情報の発行

- (1) 校内研究の状況などを交流。
- (2) 研究に関わる資料提示, 研究会情報掲載。

6. 研究紀要の作成

《研修係》

1. 石教研・江教研および関係機関との連絡調整

- (1) 学校研究責任者会議など関係会議の報告。
- (2) 関係機関の依頼事項についての対応・処理。
- (3) 研究に関する諸事項の処理。
- (4) 専門部会・課題部会で作成したレポートの集約・回覧。

2. 研究会、研修会の参加体制作りおよび環流活動。

(1) 研究会、研修会などの案内および体制作り。

☆一人一研究会参加を呼びかける

〈研究会参加の手続き〉

- 1.研究部の担当者が希望を受け付ける
 - 2.研究部の担当者が教頭に連絡し、教頭と教務との相談の上、校長が承認
 - 3.教頭から関係の係（研究部担当者・教務・旅費の関係で事務）に連絡
 - 4.研究部担当者は、本人に連絡し、事務に日程の詳細を提出
 - 5.本人と教務で補欠の内容について相談
- 泊を伴う場合は、事務からのアドバイスをもとに、本人が宿や飛行機を予約。
- ※基本的な手続きを踏みつつ、お互いに声を掛け合うように意識する。

(2) 研究会、研修会視察の報告と環流。

〈参加報告書作成について〉

- 1.研究会参加後1週間以内にレポートを作成し、研究部に提出
- 2.紀要等を参加者からお借りし、レポートと一緒に回覧（または研修日に報告）
- 3.回覧後は紀要等を参加者にお返しし、レポートは保管（年度末に紀要に掲載）

3. 職員図書の購入と管理

- (1) 校内研究に結びつく図書を中心に購入する。
- (2) ファックス資料や問題集は印刷室、その他は文書庫に保管する。

4. 研究資料の保管

- (1) 研究資料として次のものを保管する。
・研究紀要 ・道研資料 ・江教研、石教研資料 ・その他
- (2) 保管場所は研究図書に準ずる。

5. 校内実技研修会の企画と運営

- (1) 夏休みの実技研修内容の決定、企画・運営。（別途アンケートを実施）
- (2) 冬休みのスキー実技研修の企画・運営。

6. 職員体育実技研修の企画と運営

- (1) 体育指導技術の向上等を目的とした職員体育実技研修を行う。
年間行事予定に位置づけて行う。
- (2) 実施内容については担当者が決め、別途提案する。

ことばの力を育てる授業の創造

～国語科・文学的文章の読解指導を通して～

1. 主題について

○「ことばの力」について

〈「ことばの力」を育てるとは〉

「ことばの力」とは、そのまま解釈すれば「言葉の持つ力」のこととなるが、ここでは言葉を使う力、聞く力、書く力、読む力や言葉から読む力、語彙力などの、人間の言葉に関する能力を総称して「ことばの力」と呼ぶことにする。

しかし、「ことばの力」を育てるということは、話し方、聞き方、読み方、書き方、言語の知識などを身につけさせることや、コミュニケーション能力などを育てることにとどまらない。「言葉は心の使い」「言葉は身の文（あや）」「言葉は立居（たちい）を表す」などの言葉があるように、言葉は心を表す道具であり、人の品性や性行を表すものであると言われる。このことから、「ことばの力」を育てることは「心」を育てることにつながっていくし、そのことを最大の目標に据えて「ことばの力」を育てていかなければならないと考えている。

〈文化審議会の提言〉

最近によく「国語力」の向上が言われるようになってきた。文化審議会は文部科学省の諮問を受け、2003年11月に「これからの時代に求められる国語力」について検討した結果を公表した。それによると、「国語力の向上に不断の努力を重ねることは時代を超えて大切なことだが、社会の変化はいずれも国語力の問題と切り離せないものと考えられる」としている。その上で、

- ①都市化、国際化により増加した、見知らぬ人や外国人との意思疎通、少子高齢化によって変化しつつある異なる世代との意思疎通、近年急速に増加した情報機器を介しての間接的な意思疎通などにおいて、多様で円滑なコミュニケーションを実現するためにはこれまで以上の国語力が求められることは明らかである。
- ②少子高齢化や核家族化に伴って家庭や家族の在り方が変容し、従来、家庭や家族が有していた子供たちへの言語教育力が低下していると言われていたことも大きな問題である。
- ③近年の日本社会に見られる人心などの荒廃が、人間として持つべき感性・情緒を理解する力、すなわち、情緒力の欠如に起因する部分が大いと考えられることも問題である。

という分析を元に、「これからの時代に求められる国語力」として様々な提言を行っている。つまり、国語力を育てることはいつの時代も重要だが、時代の状況から「国語力向上」が大きな課題としてクローズアップされてきたということがわかる。また、この提言を読むと、研究主題の「ことばの力」と、最近言われる「国語力」は同義であると言って差し支えない。いずれにしても、「ことばの力＝国語力」を育てることは時代の要請でもあるといえる。

〈文科省の方向転換〉

文科省は先日、学習指導要領を「言葉の力」を柱に 2006年中の全面改訂をめざすと発表した。従来の「ゆとり教育」が学力低下を招いたとの分析から、大きな方向転換をするものである。

～前略～

原案では、日本の子どもの学力について、04年12月に公表された国際学力調査の結果をもとに、成績低位層が増加する「二極化」が進行していると分析。なかでも、読解力や記述式問題に課題があるなど、学力の低下傾向があると認めている。また、学習や職業に対して無気力な子どもが増えていると指摘する。

これを補うため、次の指導要領では、言葉や体験などの学習や生活の基盤づくりを重視する「言葉の力」を、すべての教育活動の基本的な考え方にすると明記している。原案は「言葉は、確かな学力を形成するための基盤。他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための手段で、知的活動や感性・情緒の基盤となる」と説明している。

～後略～

朝日新聞（2006.2.10）より抜粋

〈めざすべき方向性は〉

「国語力の向上」や「言葉の力を柱に」ということは否定しないが、それは社会問題の解決や、まして「学力向上」が目標ではない。先述のように、言葉を育てることは「心」を育てることであり、「心」を育てることは言葉を使う人間の「人格」を育てることである。その育てるべき「人格」は、教育基本法第一条「教育の目的」にある。

教育基本法第1条（教育の目的）

「教育は、人格の完成をめざし、**平和的な国家及び社会の形成者**として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に満ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない。」

このような「人格」を育成することを常に念頭に置きながら、「ことばの力」を育成していくという意識を持つことが大変重要であると考えている。

「ことばの力」を育てることは様々な要素が考えられるが、その基本はやはりことばに関する知識・技術を身につけさせることである。しっかりと知識や技術の土台を固めることが、豊かな言葉の使い手を育てることにつながっていく。そして、その過程で言葉にこだわったり自分の言葉で表現したりすることを大切にしていかなければならない。また、たくさんの文章に触れたり人と関わったりする中で、様々なことを感じたり考えたりすることもたいへん重要な要素であると考えている。

○「ことばの力」と「国語学力」

先述した文化審議会の提言にもあるように、この「ことばの力」を育てることは学校だけでなく、家庭や社会全般で、あらゆる機会になされなければならないものである。そこで、「ことばの力＝国語力」と、「国語学力」を区別して定義することとしたい。

ことばの力（国語力）	・・・	あらゆる場所、機会を通して育てる
国語学力	・・・	学校の国語科の授業を通して育てる

別に存在するというのではなく、「ことばの力」を育てる土台としての「国語学力」を国語科の授業を通して育てるということである。

○「国語学力」ははっきりしにくい

国語の授業はどの学年も全教科の中でもっとも時間数の多い教科である。「ことばの力」の育成がもっとも重視されている現れである。国語科の授業は何のために存在しなければならないかと言えば、それはまず「学力形成」のためにこそ存在する。学力を形成しない授業はどんなに楽しくても授業とはいえない。国語科の授業で「学力形成」をしっかりと行うことは、大変重要なことである。

現在の国語科は3領域1事項に分類されている。「国語学力」は、それぞれの分野の授業の中での「指導すべき事項」である。しかし、「言語事項」については比較的わかりやすく、測定も可能であるが、あとの3領域についての測定は難しく、授業を通して「形成した学力」がはっきりしにくい。

例えば、文学的文章の読解については、2002年の学習指導要領改訂で出された国語教育の方針では、

(前略) 特に、文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、①自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、②目的や場面に応じて適切に表現する能力、③目的に応じて的確に読み取る能力や④読書に親しむ態度を育てることを重視する。

となっている。しかし、実際の文学的文章の読解の授業では、登場人物の心情や様子を読み取ることが中心に行われるが、その学習を通してどんな学力を形成したかということがわかりにくい。先に述べたように、「ことばの力」を育てることの基本はことばに関する知識や技能を身につけさせることであるとの考えに基づくと、この読解指導を通してどんな言語的知識や技能を身につけさせるのかということをしてできるだけ明らかにしていく必要がある。

本研究では、「指導すべき事項」が特にはっきりしない文学的文章の読解指導を、あえて研究の中心に据えることで、十分な素材研究や教材研究を通して形成すべき国語学力を明らかにしていきたいと考えている。

○文学的文章の読解指導における「指導すべき事項」とは

文学的文章における「指導すべき事項」を大きく2つの観点に整理して考えた。

- ①価値目標・「登場人物の心情」や「様子」のような、その文章の中で読み取らせたい**内容面**。
- ②言語目標・この文章を読み取ることを通して、または読み取る過程で身につけさせたい**知識や技術面**。

文学的文章の読解に際して、従来のように登場人物の心情や様子を読み取ることはもちろん重要なことである。「価値目標」とは、教師の発問等の手だてによって、子どもたちに登場人物の心情に寄り添い、感動したり自分の考えを持ったりさせる目標である。その中には、先述した「心」を育てるという側面もあると考えられるので、教材文そのものの持つ価値を十分に分析していかなければならない。

同時に、その文章を読み取る過程で、基礎的な「聞く・話す・読む・書く・言語事項に関する知識」を計画的に身につけさせていくことが必要と考えている。それを「指導すべき事項」の「言語目標」として明らかにしていく必要があると考えている。

○「指導すべき事項」を明らかにし、それを子どもたちに身につけさせるために

価値目標・言語目標を明らかにするためには、十分な素材研究・教材研究が必要不可欠である。次に、明らかになった「指導すべき事項」を身につけさせる方策を考えることになる。

その方法として、本研究では、思考を促す発問・指示と全員参加の手だてを通してその実現をめざす。理由は二つ。一つは授業の基本である発問・指示と全員に力をつけるということを中心に据えるため、もう一つは、私たちも「ことば」にこだわって研究を進めていくことが重要であると考えているからである。

○「ことばの力」を育てる環境整備

先述のように「ことばの力」を育てることは全教育活動を通して行われなければならない。基礎学力はもちろん、よりよい言語環境を整備していく必要がある。では、よりよい言語環境とは何かということを検討していかなければならない。それは目に見える掲示物のようなものも環境であるし、話し方や言葉遣いの約束なども環境である。教師が手本となって、望ましい「ことば」が飛び交う環境を整備していく取り組みが重要と考えている。

いずれにしても、日常的にことばの力を育てることを意識していくことが、たいへん重要である。そのことが、国語科の学習の中での「学力形成」を支えることにもつながるし、また、国語科で形成した学力を他に生かすことにもつながると考えている。

今年度を2年計画の2年次目とし、昨年度の実践や話し合いを生かしながら授業実践・理論学習・環境整備を行っていきたい。

2. この研究を通して育てたい子どもの姿

- ・根拠をもって、自分のことばで表現する子ども
- ・ことばを大切にし、ことばにこだわって考える子ども
- ・基礎的なことばの技術を身につける子ども→※下欄参照

※基礎学力として育てたい子どもの姿（全学年対象）

1. 聞く ①話し手を注目・注視して聞く（意識を向ける） ②反応しながら聞く（頷くなど） ③話を最後まで聞く	3. 読む ① <u>ちょうどよい速さで音読する</u> ②口形に気をつけ、はっきりと音読する ③間の取り方や抑揚などに気をつけて読む
2. 話す ①場に応じた声量で話す ②聞き手を見て話す ③一文を短く、語尾までしっかりと話す	4. 書く ①正しく書く（字形） ② <u>正確に書き写す（視写）</u> ③ <u>文字を正しく使う</u>

下線太字については、数値で到達基準を設定し、実態調査によって個々の状況を把握し、手だてをとるもの。詳細は後述。

3. 研究仮説

思考を促す発問・指示、全員参加の手だてによって、ことばにこだわり、根拠をもって自分のことばで表現することができる。

4. 研究内容

1. ことばの力を育てる文学的文章読解の授業づくり・・・(全校研・交流授業を通して)

(1) 本時の「指導すべき事項」を明らかにする教材研究

○①素材研究→②教材研究のプロセスを経ることで、「価値目標」と「言語目標」それぞれの「指導すべき事項」を明らかにする。

○教材研究を通して「教師の解」を明確にもつ。

※①素材研究・・・作品に一読者として読み浸る段階。音読、意味調べ、書き込みなどを行うこと。

②教材研究・・・教師として読む段階。①をもとに、子どもたちが読み違えそうな部分、大切なのに気づかずに通り過ぎてしまいそうな部分を押さえ、「指導すべき事項」を明らかにすること。

・教師の中にしっかりとしたイメージがなければ評価も指導もできない。育てたい子どもの姿を具体的にイメージできているかどうかが問われてくる。素材研究・教材研究等によって、身につけさせたいことを明らかにしていく作業はとても重要と言える。

(2) ことばの力を育てる授業展開の工夫

【価値目標に関わって】

全員に思考を促す発問・指示

○子どもたち全員に思考を促す発問・指示を工夫する。

○一部のよく発言する子だけで展開していくような授業ではなく、全員が思考せざるを得なくなる緊張感のある学習展開を工夫する。

※「全員に思考を促す」ポイント

- ・発問することに意味がある場面での発問となるようにする。
- ・子どもたちから多様な意見が出るような発問をつくる。
- ・主要な発問のあとに必ず、思考をまとめて自分の考えを明らかにする場を設定する。
- ・理由を必ず述べるような指示をする。

【言語目標に関わって】

即時評価・即時指導

○身につけさせたい基礎的な知識や技術はその場で指導する。

○向上したことを具体的に評価し、ほめる。

※「言語目標」は、主に研究内容2で示す基礎学力、国語科で使われる用語類、読解の技術などを指す。

2. ことばの力を支える基礎学力の定着・・・(日常実践を通して)

- ことばの力を支える基礎学力を「聞く・話す・読む・書く」とし日常の授業の中で定着を図る。
 - ・ことばの力を支える基礎学力の具体的内容と、音読・漢字・視写については到達基準を設定する。
 - ・国語に限らず、すべての授業の中で基礎学力をつける手だてをとる。
 - ・4月・9月・2月に基礎学力実態調査(音読・漢字・視写)を行う。
- ことばにこだわる子どもを育てる観点から、3年生から国語辞典を一人一冊準備させ、日常的に使う指導をする。

※基礎学力の定着に関しては、研究12を参照

3. ことばの力を高める言語環境づくり・・・(日常実践を通して)

○言語事項に関する環境の整備

- ・掲示物などの環境整備は、学年の実態の応じて学年・学級ごとに取り組む「例」をあげるにとどめ、学校全体の統一した取り組みとはしない。(全体で取り組むべきというご意見があるものに関しては、この限りではない)
- ・よりよい「ことば」が飛び交う言語環境づくりを重視する。

言語環境の例

- ・学習に必要な掲示物(教科書の本文、漢字など)
- ・定着されていない学習ルールに関する掲示物(発言の約束、声のものさし、作文用紙の使い方など)
- ・教材の関連図書の整備(教室の)
- ・教師の日常の言葉遣い
- ・教師や子ども同士で指名するときの言葉遣い(さん、くんづけ)
- ・授業中の教師の姿勢、立ち回り
- ・TPOに応じた言葉の使い分け
- ・教師による基礎学力(聞く・話す・読む・書く)の模範的実践

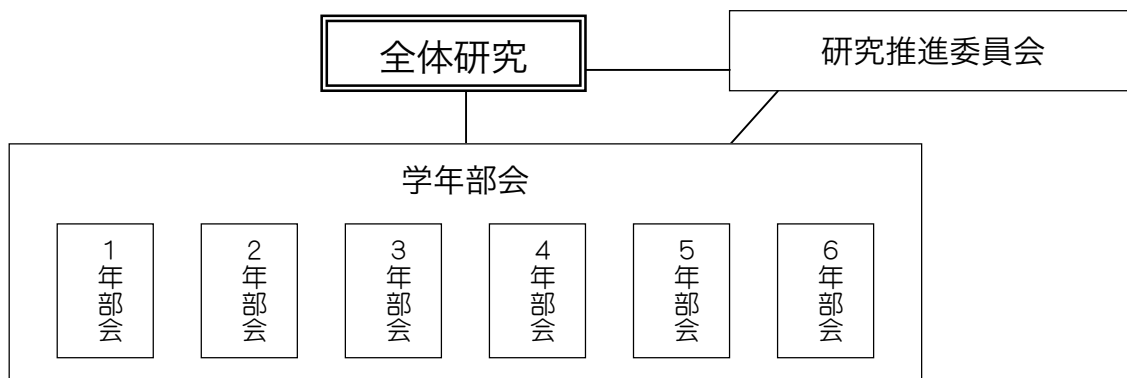
※教師の言葉や姿勢についてはそれぞれの考え方があると思われるが、私たちも「ことば」にこだわっていく必要性から、研究の中ではもちろん、日常的に話題にしていく必要があると考えている。

5. 研究方法

①研究体制

- ・全体研
 - 研究の全体計画検討
 - 理論研・実技研
 - 全校研事前研・事後研
 - 研究のまとめ検討
- ・研究部
 - 研究の企画・推進
 - 研究紀要作成（研究の集約と蓄積）
- ・学年部会
 - 学年ごとに部会を構成する。担任外は、各学年部会にわかれて所属する
 - 部会ごとに代表者・研究推進委員・記録をおく
 - 代表者～部会研究の推進，部会の司会進行。
 - 研究推進委員～研究部とのパイプ役。研究部員がいる学年は兼任。
 - 記録者～部会の話し合いや実践資料の記録（含：写真）・蓄積，部会情報の発行。

○組織図



②研究の進め方

全員が研究授業をしよう

0.1%の授業より残りの99.9%の授業を充実させる研究
成果と課題が具体的に明らかになる研究
子どもたちもわたしたちも向上する研究

- 1.研究計画提案・学年部会編成（役割分担・学年部会計画・全校研授業者決定）
- 2.理論研（参考文献の学習，ビデオ視聴など）
- 3.授業実践・記録化

○学年部会ごとに授業公開を行い，研究実践の交流を図る。

・全校研

→各学年部会1本の全校研を実施。単元は物語教材。全体研で事前研・事後研を行う。全員参加。

・学年研（交流授業）

→全校研を行わない学級はすべて学年研を実施。学年部会で事前研，事後研を行う。

基本的にフリー参観だが，学年部会メンバーは必ず参観する。

6月から11月の期間をめぐりに実施

※学年部会を基本としていることから，授業案検討は原則として学打ちの中で日常的に行う。研究に関する話し合いの際は，学年で担任外のメンバーにも声をかけるようにする。

○積極的に記録化を進める

・授業づくりの参考にした書籍や資料については，出典等を明らかにする。

・紀要作成等に生かすことを意識して，活動の様子の写真撮影を積極的に進める

4.部会まとめ（学年部会）

5.研究のまとめ（研究部）

6. 研究日程

今年度の日程（2年計画の2年次）

（区切りは週単位。基本的に月曜日から日曜日までを一週としている。主な行事予定には水曜日の行事と大きな行事を記載。）

※定例の学年部会を活用して授業づくりを進めることを基本としているが、学年部会の日程は記入していない。）

1 学期

月	主な行事予定	研究関係	備考
4	4(火)職員会議 6(木)始業式・入学式		3(月)研究部会
		12(水)研修日①(2006年度研究計画提案 職体)	12(水)職員体育①
	19(水)職員会議 26(水)家庭訪問⑤	基礎学力 実態調査	
5	3(水)(憲法記念日)		
		10(水)研修日②(学年部会・・部会体制, 授業者決定)	12(金)研究部会
	17(水)職員会議 24(水)生徒指導交流会		
	31(水)運動会総練習 反省会		
6	4(日)第8回運動会		1(木)研究部会
		7(水)研修日③(理論研修①)	学年研(交流授業)
	14(水)職員会議		
		21(水)研修日④(理論研修②) 28(水)研修日⑤(学年部会・・全校研授業づくり)	20(火)職員体育② 27(火)研究部会
7		5(水)研修日⑥(全校研①事前研)	
	6(木)7(金)宿泊学習	12(水)全校研① 研修日⑦(全校研①事後研)	13(木)研究部会 20(木)研究部会
	19(水)職員会議		
	25(火)終業式		

2 学期

8	18(金)職員会議	17(木)実技研修(午後)	
	21(月)始業式	23(水)研修日⑧(全校研②事前研)	24(木)職員体育③
	31(木)1(金)修学旅行	30(水)全校研② 研修日⑨(全校研②事後研)	29(火)研究部会
9		6(水)研修日⑩(全校研③事前研)	
		13(水)全校研③ 研修日⑪(全校研③事後研) (全校研④事前研)	12(火)研究部会
	20(水)職員会議		
		27(水)研修日⑫(全校研④事後研)	
10		4(水)研修日⑬(学年部会・・)	3(火)研究部会
	11(水)職員会議		
	18(水)学芸会児童公開・反省 22(日)学芸会父母公開		
	25(水)生徒指導交流会		26(木)職員体育④
11		1(水)研修日⑭(全校研⑤事前研)	2(木)研究部会
		8(水)全校研⑤ 研修日⑮(全校研⑤事後研) (全校研⑥事前研)	※一斉公開日の関係 で変更の可能性あり。
	15(水)職員会議		14(火)職員体育⑤
		22(水)全校研⑥ 研修日⑯(全校研⑥事後研) 29(水)研修日⑰ 学年部会研究のまとめ	12/1(金)研究部会
12		7(水)研修日⑱(学年部会のまとめ交流・職体)	7(水)職員体育⑥
	13(水)職員会議		19(火)研究部会
	25(月)終業式	研究アンケート締め切り	

3 学期

1	18(木)職員会議 (学校評価)	17(水)研修日⑱ 実技研修 (スキー)	
	19(金)始業式		
	24(水)職員会議 →	研究のまとめ提案	
	31(水)校務部会		31(水)2(金)研究部会
2	7(水)8(木)職員会議 (新年度計画)		
	14(水)職員会議		16(金)職員体育⑦
		21(水)研修日⑳ (新年度研究計画提案)	23(金)研究部会
		28(水)研修日㉑ (新年度研究計画提案予備日, 職体)	28(水)職員体育⑧
3	7(水)職員会議		
	14(水)		
	18(土)第7回卒業証書授与式		
	21(水) (春分の日)		
	23(金)修了式 (離任式)		

ことばの力を支える基礎学力定着の取り組み

ことばの力を支える基礎学力を「聞く・話す・読む・書く」とし日常の授業の中で定着を図る。

- ・ことばの力を支える基礎学力の具体的内容と、音読・漢字・視写については到達基準を設定する。
- ・国語に限らず、すべての授業の中で基礎学力をつける手だてをとる。
- ・4月・9月・2月に基礎学力実態調査（音読・漢字・視写）を行う。

1. 基礎学力の具体的内容と定着に向けた取り組みについて

1. 聞く ①話し手を注目・注視して聞く（意識を向ける） ②反応しながら聞く（頷くなど） ③話を最後まで聞く	3. 読む ① <u>ちょうどよい速さで音読する</u> ②口形に気をつけ、はっきりと音読する ③間の取り方や抑揚などに気をつけて読む
2. 話す ①場に応じた声量で話す ②聞き手を見て話す ③一文を短く、語尾までしっかりと話す	4. 書く ①正しく書く（字形） ② <u>正確に書き写す（視写）</u> ③ <u>文字を正しく使う</u>

※学年の実態に応じて、定着に向けた取り組みを行う。

- ① 1回目の実態調査後、学級の基礎学力定着の実態を、学年で交流。学年の定着の実態を考察し、二学期以降の定着に向けた取り組み（授業内、授業外、その他）を計画する。（一学期末～夏期休業）
- ② 職員会議で、学年の実態、考察、取り組みの計画を交流する。（月 日）
- ③ 学年で計画した取り組みを進める。（二学期以降）
- ④ 2回目の実態調査で、学年学級で取り組みの成果と課題を考察する。（三学期末）
- ⑤ 職員会議で、全校的な定着の状況、有効な取り組みを交流する。（月 日）

(1) 聞く

- ①話し手を注目・注視して聞く・・・目は脳の一部。目を向けることは意識を向けること。
- ②反応しながら聞く・・・「対話」であることを意識し、頷く、首をかしげる、表情などで反応する。
- ③話を最後まで聞く・・・対話のマナーであるだけでなく、相手を受け入れる姿勢を表すことでもある。

a) 留意事項

「聞く」ことは「ことばの力」を支える基礎学力の基本。低学年からのしっかりしたルール作り、即時指導が大変重要である。

b) さらに「聞く」力をのばすために・・・

- ・指を折っていくつ話があったか数える・・・全校朝会などの校長先生のお話の内容を数えるなど。
- ・メモをとる・・・毎日の連絡をメモするなどの訓練
→教師がメモをとりやすい話し方をすることで、「話す」力の訓練にもなる。

- ・わからないことをメモする・・・調べるためにメモをすることで、積極的に聞く姿勢を育てる。
- ・我慢して集中して聞く訓練

(2) 話す

- ①場に応じた声量で話す・・・特に「小さな声」を修正。声を届けることは、伝える意志を示す基本。
- ②聞き手を見て話す・・・聞き手を引きつける技術でもあるし、伝える意志を示すことでもある。
- ③一文を短く、語尾までしっかりと話す・・・わかりやすく話す基本技術。

a)留意事項

年齢が上がるにつれ、声が小さくなりやすい。また、口が開いていなかったり語尾までしっかりと話さなかったりすることもよく見られることである。徹底した即時指導で改善を図る必要がある。また、話し方は技術面が多いので、教師がよい話し方の手本を身につけて常に示すと同時に、低学年から鍛えていく必要がある。スピーチなどの日常活動化は大変有効な手だてである。ただし、やりっぱなしにせず、指導のチャンスと捉えて取り組むようにする。

b)さらに「話す」力をのばすために・・・

- ・言いたいことをなるべく短い言葉で述べる訓練をする。ズバリ一言で！
- ・ラベリングやナンバリングなどの基本技術を用語と共に教える。

(3) 読む

- ①ちょうどよい速さで音読する・・・自然な速さで使えないように読む。到達基準を設定する。
- ②口形に気をつけ、はっきりと音読する・・・聞き取りやすい発音を意識。話し方にも通ずる。
- ③間の取り方や抑揚などに気をつけて読む・・・読み取った内容に応じた表現技法として。

a)留意事項

音読（素読）は基礎学力中の基礎学力の一つである。文が自然にすらすら読めなくては、内容の理解どころでなくなる。到達基準を決めて、全員に最低限の音読（素読）力を身につけさせる必要がある。間の取り方や抑揚などは具体的に指導する必要がある。よく「感情を込めて・・・」と言うが、その感情のこめ方を具体的に指導する必要があるということである。場面の様子や作者の心情、自分の読み取りに応じた読み方、文章の種類に応じた読み方を身につけさせたい。

また、「話す」との関連が深いですが、低学年特有のゆっくりとした不自然な読み方は早期に修正すべきと考える。日常の「おはようございます！」「はじめます！」から意識的に修正していくことも必要と考える。

b)さらに「読む」力をのばすために・・・

ここでは、「読む」力を単に文字を音に変換することだけでなく、文章を読むこと全般に広げて例をあげる。

- ・わからない言葉はすぐに調べるようにする・・・国語辞典の日常活用→言葉にこだわる
- ・習ってない漢字も板書などでどんどん使う（漢字の早期提出）・・・漢字の書き取り力にも効果大

◎「音読（素読）」力の定着に向けて

ア) 音読量の確保

- ・国語の時間においては、繰り返し文章を音読する場面を設定する。
- ・国語の時間だけでなく、どの教科でも文章を声に出して読む場面を意識して増やしていく。
- ・家庭でも音読を習慣化させる工夫をする。

イ) 音読のしかたの指導

- ・正しい音読の仕方を明確に指導する。
（姿勢、教科書の持ち方、声の出し方、声の大きさ、発音、先を見て読む、まとまりで読むなど）

ウ) 意欲を大切にしたい指導

- ・ほめる・・・具体的に評価する。
- ・音読パターンの変化・・・一斉読み、リレー読み、交代読み、追い読み、一人読みなど
- ・音読回数の記録・・・音読カード、タイトルの横に○を書き塗りつぶす方法など

(4) 書く

- ①正しく書く・・・文字を整えて書く。学習への意欲にも関わる要素。
- ②正確に書き写す・・・ある程度の速さで正確に書き写す。学習スピードにも影響する大切な要素。
- ③文字を正しく使う・・・特に漢字を使えるように覚えることが重要。

a)留意事項

ある程度整えて書くことができれば、文字を書くことが好きになる。文字を書くことが好きと言うことは勉強が好きということにつながる。同時に、ある程度のスピードで文字を書くことは、学習を進めるスピードに大きく関わるので、重視しなければならない基礎学力と考えている。

③については、「読む」に記述した漢字の早期提出と合わせて、「使える」知識として身につけていく必要がある。意味調べや成り立ち調べなどを取り入れた学習を展開していく必要がある。

b)さらに「書く」力をのばすために・・・

- ・日常的に文章を書く機会を多く設ける（作文、日記）
- ・・・具体的な書き方の指導はもちろん、字形、漢字などの指導のチャンスとして生かす。

◎「正しく書く」力の定着に向けて

①留意事項

ア) 正しい鉛筆の持ち方指導

- ・低学年段階において、徹底して正しい持ち方を指導する。

イ) 「硬筆書写」の時間の充実

- ・硬筆書写の授業の重要性を見直し、指導に当たる。
- ・文字がなかなか整わない子に対しては、「なぞる」作業を多く取り入れる。

ウ) 日常のノート指導

- ・日常のノート指導に力を入れ、「書き直し」などの指導を徹底する。
- ・上達を実感させる声かけ、評価などをきめ細かく行う。

◎ 「正確に書き写す（視写）」力の定着に向けて

①留意事項

ア) 書く機会の確保

- ・ 日常の授業で、「書く」活動を意識して位置づける。
- ・ 原稿用紙に文章を書く練習をする。
- ・ 一度に多くの文を書かせると、作業に大きな差が出るため、短く区切って作業させるなどの工夫をする。

イ) 書き方の指導

- ・ 正確に転写する方法を指導する。(言葉や文節ごとに記憶するなど)

ウ) 正確さの点検

- ・ 各教科において、教科書等の文章を転写するような活動を、内容に応じて取り入れる。その際、誤字脱字をていねいに点検する。

◎ 「文字を正しく使う（漢字）」力の定着に向けて

①留意事項

ア) 新出漢字指導の工夫

- ・ 低学年段階の徹底した指導を行う。
- ・ 新出漢字指導の時間確保や指導法の工夫、実践交流を行う。

イ) 繰り返し行う漢字テスト

- ・ 小テストの実施等で、繰り返し漢字を練習しなければならない状況を作る。

ウ) 漢字に関心を持たせる工夫

- ・ 漢字の成り立ちや漢字遊びの学習を積極的に取り入れる。
- ・ 教科書の「漢字の学習」を系統的にとらえて確実に指導する。

2. 「音読」「漢字」「視写」の到達基準

読む「素読」・・・すらすらと文章を読む力

〈つきたい音読力〉

- ・ 教科書程度の文章を、ちょうど良い速さで正確に音読することができる。

〈到達基準〉

- ・ 速さ・・・1分間に280字読める
- ・ 正確さ・・・見開き2ページ程度の範囲で、3回以内のミスで読み切ることができる。

書く「視写」・・・文章を正確に写し取る力

〈つきたい視写力〉

- ・ 文章を正確に書き写すことができる

〈到達基準〉

学年	到達基準
1年生	10分間で、 <u>100</u> 字正確に書き写すことができる。
2年生	10分間で、 <u>150</u> 字正確に書き写すことができる。
3年生	10分間で、 <u>200</u> 字正確に書き写すことができる。
4年生	10分間で、 <u>250</u> 字正確に書き写すことができる。
5年生	10分間で、 <u>300</u> 字正確に書き写すことができる。
6年生	10分間で、 <u>350</u> 字正確に書き写すことができる。

※ 誤字脱字、雑すぎて読めない文字などは数えない。「丁寧さ」については基準が曖昧となるが、やむを得ない。

書く「漢字」・・・ひらがな、カタカナ、漢字が読めて、正しく書く力

〈つきたい漢字力〉

- ・ひらがな、カタカナ、漢字を正確に書くことができる。

〈到達基準〉

- ・当該学年に学習した漢字を9割以上書ける

3. 基礎学力定着の実態調査

(1) 実施の日程

〈調査から交流までの流れ〉

- ①実態調査実施（担任）
- ②採点・記録用紙記入（担任）
- ③FDに入力（研究推進委員）※ここまでを期間内に
- ④集計データをプリントアウト（研究推進委員）
- ⑤データをもとに、学年としての分析と今後の取り組みを話し合い、まとめる。（学年部会）
- ⑥話し合った中身をFDに入力（研究推進委員）
- ⑦FDを係に提出
- ⑧係で全校の集計結果と、各学年の分析を印刷し、職員会議で交流。

実施および記録入力	学年部会	FD提出期限	交流
①4月17日(月) ～28日(金)正味10日間	5月1日(月)	5月15日(月)	5月17日(水) 職員会議
②9月11日(月) ～22日(金)正味10日間	9月25日(月)	10月9日(水)	10月11日(水) 職員会議
③2月13日(火) ～23日(金)正味9日間	2月26日(月)	3月5日(月)	3月7日(水) 職員会議

(2) 「読む（音読）」力の実態調査

①調査方法

4月・・・前年度の3学期最後の教科書の文章で、読む速さと正確さを測定する。

9月・・・1学期に学習する教科書の文章で、読む速さと正確さを測定する。

2月・・・2学期に学習する教科書の文章で、読む速さと正確さを測定する。

学年	4月	9月（説明文）	2月（説明文）
1年	お手がみ		
2年	アレクサンダとぜんまいね ずみ		
3年	わすれられないおくりもの		
4年	ごんぎつね		
5年	みずぶさがしの旅		
6年	田中正造		

②到達基準（2月の実態調査までに到達させたい基準）

速さ・・・1分間に280字読める。

正確さ・・・見開き2ページ程度の範囲で、3回以内のミスで読み切ることができる。

③実施要領

- i) 担任がちょうど良い速さで範読。（1分間280字程度の速さ）

- ii) 一人ずつ教師のところに来て音読。
- iii) 記録用紙に、結果を記入。

(3) 「書く（漢字）」力の実態調査

①調査方法

- 4月・・・前学年の1学期20問・2学期20問・3学期10問、計50問のテスト
- 9月・・・1学期に学習した漢字50問テストで行う。
- 2月・・・2学期に学習した漢字50問テストで行う。(15分間)
- ※テスト時間は15分間
- ※4月・9月は、1年生は実施しない。
- ※テストは研究部が教科書の用例をピックアップして作成。

②到達基準

- 4月・・・前学年に学習した漢字を9割以上
- 9月・・・1学期に学習した漢字を9割以上
- 2月・・・2学期に学習した漢字を9割以上

③実施要領

実施期間にテストを行う。

(4) 「書く（視写）」力の実態調査

①調査方法

教科書程度の文章を、手本を見ながら原稿用紙に書き写すテストを実施する。
手本は、学年ごとに応じた文章を準備する。(テストは研究部作成)

②到達基準

学年	到達基準
1年生	10分間で、100文字を正確に書き写すことができる。
2年生	10分間で、150文字を正確に書き写すことができる。
3年生	10分間で、200文字を正確に書き写すことができる。
4年生	10分間で、250文字を正確に書き写すことができる。
5年生	10分間で、300文字を正確に書き写すことができる。
6年生	10分間で、350文字を正確に書き写すことができる。

※誤字脱字、雑すぎて読めない文字などは数えない。「丁寧さ」については基準が曖昧となるが、やむを得ない。

③実施要領

実施期間にテストを行う。

(5) 事後の学年部会について

- ・結果をもとに、学年としての考察と今後の具体的な取り組みを話し合ってください。
- ・調査した基礎学力以外の分野についての振り返りも、同時に行ってください。